



日牟牟采成記卷之七

十二月

前と小冬と云中と大きと云〇十二月の異名季冬 海解  
殷月 郷と古解云〇十二月乃和名と古名はくは伊と  
む之伸名とせしむいありい種とよまむ事あるに世のいありありと  
そいふと解せらるる一 奥の御物と云ふ事あり 昔作曰古名はくは伊と  
月をいふとすといふことありとすと海をあり 伊と解せらるる  
事あり 國は伊と解せらるることありとす 昔作曰伊と解せらるる  
けしとすなり 伊と解せらるることありとす 昔作曰伊と解せらるる  
海をいふことあり

朝日 殷乃代子之建 丑月と祭 替と云う一のい今日すから

殷の正月元日なり 國俗これ日と云ふ朝日と云ふ又云ふ  
のちらとて 鶴と祭 終事なり 古の時よりた  
かり一 事と云ふれ 一年の万事なり 朝日と云ふ  
のちらとて 鶴と祭 終事なり 古の時よりた



八日ともくして是れ臘八と云今日電と云く月経と云す  
へ一書時記は十二月八日経脈通電邪と云の案  
業は電と下つるを云ふくは風俗なり

梅と云ふは風俗通は顔頰氏子何の黎と云と云ふら  
祝歌なり記しては電邪と云と何の志んは  
こしは祝歌と電邪とすはあつて又在書事紀は  
身は是れ神皇津姫神は二神を今乃人此云の電  
邪ありと云ふはこれと云はれら我國の電邪之  
○今日水と云はる電邪と云入野と云一校人云  
臘中野水来年治一切疫病製飲合臘八日水

丸神たまごがみなりとあり

十五日新加佛涅槃日あり破邪神は周穆王五千二  
年二月十五日佛涅槃すとあり周代代は十月と云  
案方とすはな二月は今代十二月あり志るは今世二月  
十五日と云は佛滅日とすは云ふあり

○上旬中旬の中臘月の節より多く来と春  
解しては二月の用と云はるは冬春来  
るは臘日に来と春と云はるは

范子終回坐府席曰金吾石湖後來四史の續記  
十支採其神名賦一待心賦凡士其一冬春行臘日



春米為一案計一多取二梓白臘三中畢四事五。恐之土六  
瓦念中七經年八不壞九名十冬春米十一 出子事  
又新鼎

○十五日十六日十七後屋中乃煤塵十八と掃十九へ二十煤塵二十一と掃二十二に  
世人多二十三動日二十四と完二十五て恒例二十六より終二十七ま二十八て或風二十九ぬ三十れ三十一後何  
思三十二ひ動日三十三に掃三十四へ三十五十五日三十六は風三十七ぬ三十八る三十九も四十暖四十一りと用四十二へ

圖書四十三と澤志四十四を引四十五て臘月四十六廿四日四十七毎家四十八掃四十九塵五十也

あまの五十一中五十二舞五十三う五十四ま五十五る五十六や五十七乞五十八又五十九動日六十の六十一拘六十二と六十三方

二十日六十四 廿日の後よりと考ふ 國俗六十五は月六十六中旬六十七より後六十八乞六十九人七十は七十一緯七十二緯七十三

み七十四る七十五面七十六と七十七ぢ七十八り七十九ひ八十又八十一緯八十二緯八十三を八十四膝八十五と八十六膝八十七ひ八十八鳥八十九帽九十と九十一意九十二

せ九十三ま九十四ぞ九十五ろ九十六と九十七ひ九十八て九十九ろ一百く一百一の一百二後何一百三と一百四う一百五へ一百六ひ一百七舞一百八り

く一百九り一百十あり一百十一せ一百十二に一百十三ろ一百十四ん一百十五と一百十六ひ一百十七舞一百十八ま一百十九ひ一百二十と一百二十一ひ一百二十二ま一百二十三る一百二十四は一百二十五  
都一百二十六都一百二十七ち一百二十八と一百二十九ま一百三十と一百三十一あ一百三十二事一百三十三あり

○下旬一百三十四北一百三十五也一百三十六親戚一百三十七も一百三十八送一百三十九神一百四十て一百四十一業一百四十二業一百四十三と一百四十四契一百四十五す一百四十六又一百四十七志一百四十八は

下一百四十九北一百五十親戚一百五十一も一百五十二送一百五十三神一百五十四て一百五十五業一百五十六業一百五十七と一百五十八契一百五十九す一百六十又一百六十一志一百六十二は

お一百六十三と一百六十四膝一百六十五へ一百六十六一一百六十七或一百六十八親一百六十九の一百七十膏一百七十一と一百七十二患一百七十三患一百七十四何一百七十五人一百七十六師一百七十七傳一百七十八と一百七十九お一百八十ま一百八十一り

人一百八十二親一百八十三身一百八十四及一百八十五あ一百八十六人一百八十七の一百八十八病一百八十九と一百九十療一百九十一せ一百九十二り一百九十三醫一百九十四師一百九十五を一百九十六と一百九十七ま一百九十八も一百九十九ひ二百り

思二百一ひ二百二あ二百三つ二百四く二百五物二百六と二百七ま二百八る二百九一二百十一二百十一疎二百十二疎二百十三を二百十四ろ二百十五く二百十六ひ二百十七つ二百十八る二百十九や二百二十れ二百二十一す

を二百二十二救二百二十三く二百二十四は二百二十五ん二百二十六り二百二十七救二百二十八へ二百二十九せ二百三十ん二百三十一と二百三十二う二百三十三ご二百三十四ひ二百三十五て二百三十六潔二百三十七か二百三十八く二百三十九業二百四十を

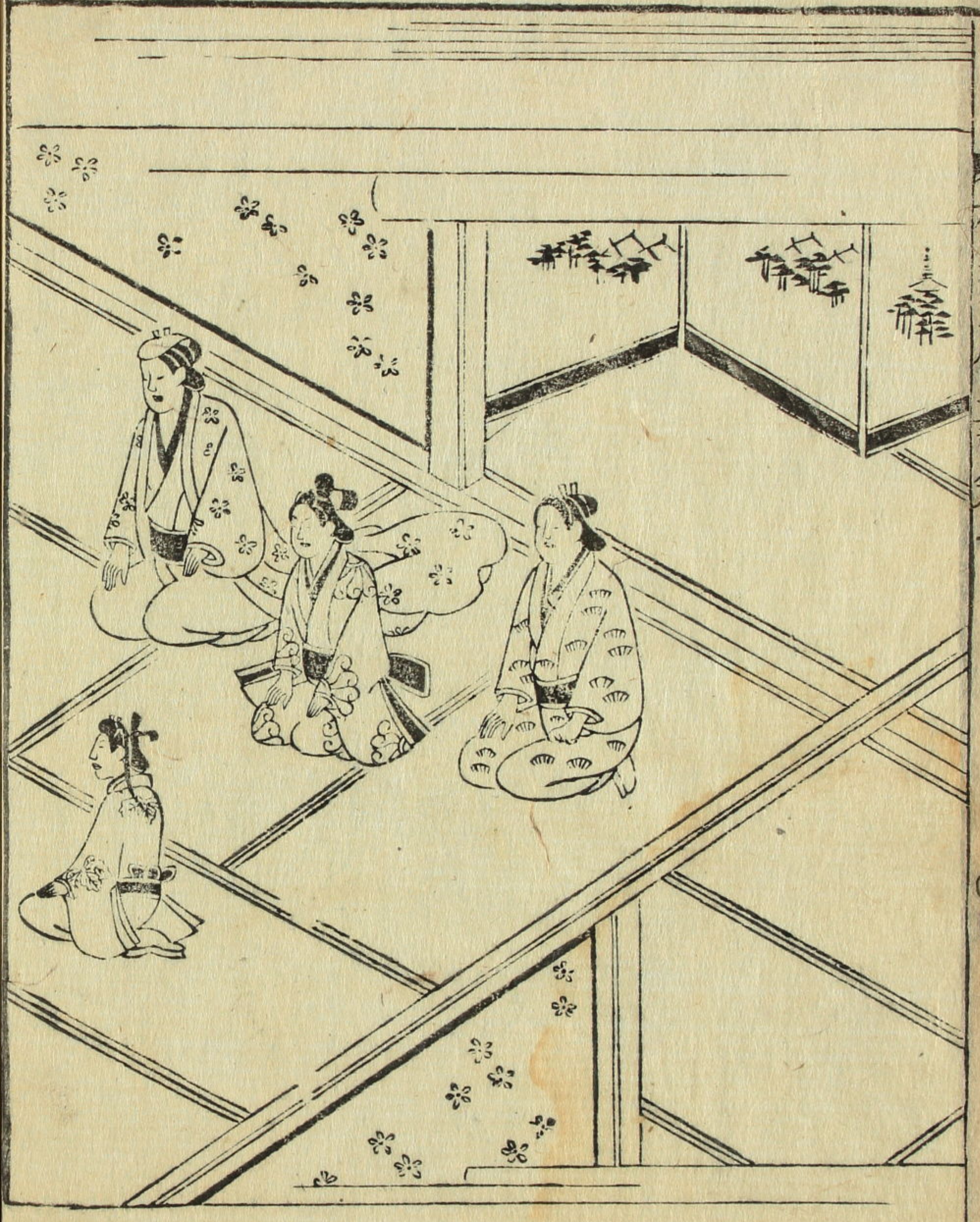
傳二百四十一へ二百四十二一二百四十三都二百四十四者二百四十五な二百四十六る二百四十七ろ二百四十八の二百四十九元二百五十都二百五十一者二百五十二か二百五十三れ二百五十四の二百五十五徳二百五十六義二百五十七終二百五十八れ

す二百五十九く二百六十備二百六十一と二百六十二あ二百六十三つ二百六十四く二百六十五一二百六十六國二百六十七務二百六十八と二百六十九め二百七十ら二百七十一む二百七十二事二百七十三を二百七十四ま二百七十五る二百七十六す二百七十七財二百七十八と











○は月下の平乃日也くよとて上臈をぬけし  
髪と一毛をちりまは一年乃百髪は乃の髪を  
髪に和して焼その灰と薬よ入るよと地よあむ

二十六七日は比徳と製すよ一日よりあむと  
よのつた大室乃常の肉よ別に徳と他り今の辛  
は用乃のものと製ゆへ腕水と徳と製すまハ味  
美はて久よ徳は且性利方なるあり強よ薬初よ  
用乃ハ日殺多く摩下るを堅破方なるよく製す  
次他大室乃月よ製して色その聖乃より水は清  
の薬にやりくあり九徳と製すよよかあむ色は

あり悪よ米とくよ又ハ米とありハ酒  
阿波ハ必ありたハ初一ハ酒よこれ法に  
作れよハ用ハ久くありて酒氣なるよ  
そ悪と用ハ徳ゆらよ若く煮れハ用  
にたす必つてよ酒よこれハ用  
醱酒のよく糖米と製するよ醫書ハ  
よとくハ甚く徳ハ酒とよハ  
はとくよと徳ハとよハ

二十の 屠種と合は

○林葉葉屠種方 大黃 山椒 桔梗 肉桂 防風



各五々 川烏頭 白朮 菝葜 各一々 右八味對三絳囊に

多し 漆白に井中二擲 應に沈め元日は取か

裏に又湯又浸しぬ 煎く 湯を向くこれと飲後

に囊を井中二まき 川乞と服す 此の當年瘰癧と

不病 菝葜の心後末の事あり 日本をわかれ

○又方 本草綱目より陳延之小方云 兼他方也 赤朮 桂心 各七々

防風 一兩 菝葜 五々 蜀椒 桔枝 大黃 各五々 烏頭 二五五々

赤小豆 十四枚 三劑乃絳囊 此れを乃そ取

○又方 赤朮ハ蒼朮をり 桂心ハ肉桂の皮なり 川椒 去皮各 白朮

桂心 各一々 烏頭 炮去皮 吳茱萸 二分 防風 一兩

○本初居務方 白朮 桔枝 山椒 防風 各一肉桂 五々

大黃 二分半

○白散方 白朮 桔枝 細辛 各一々

○瘰癧散方 麻對 一々 山椒 細辛 防風 桔梗 乾薑

白朮 肉桂 各五々 已上三方典藥頭魚安信濃方也

○は日志の繩と作り 漆日此用之

晦日 又漆日 沐浴 既合倍部より 煎く 湯を向くこれと飲

既合此後 士と名をよみ 湯を向くこれと飲

長親戚乃家と作り 湯を向くこれと飲



はなびす人

○屋中及宅中と共く掃除し門松を立てたす  
泡運種とかくはまのたけふのつる明りたふとて松竹とあつた  
らあつたりとゆつるまきとてたてたす

○今春と陰暦といふ又陰暦といふ一年の終り  
其の日はしんじつといふ終服と忌酒食と生紐  
乃重最又その日三つうを酒食と食しあひぬ  
何之つてせと事あつてぬる事と申す  
申してはしんじつと申す新を  
月日の風土記といふ陰暦其先祖も幼衆飲祝

願ふ教徳之分来けよ一年の終り花を  
あつた事あり又佛あり今春花人の  
毎玉まつる事と申す都道終り  
と氣流居る花を申す佛土花作用と  
○今春の床障子及夜下電とに香を焼く辟邪結  
溼宜氣助湯徳又外氣と焼く焼く  
所を焼く焼く焼く焼く焼く焼く  
はなびす人といふ事あり  
事なりと申す



花はくしむしと月令廣義の如きなり

○今年中一處の用何事と云れ兼と今夕中庭の  
蕪の疲動と趣と田舎茶室にひんえり又今夕茶  
木と多く焚い疲室と趣と直生種よりえり

○俗に流るる今宵儂豆と云り儂豆と云りつうの儂豆  
乃花の人の儂豆

徳川中納言徳川氏十二月晦日の一もまに及え侍り又まらり  
金吾殿將進備前と云る今宵は事と云り

と花豆と云りして悪鬼とあせぐる世後同答り

と云ひし悪鬼乃花の如きなるは禁中書せり

陰陽寮といふんとよみて上は下と云り

ありと云り

いことと云りて目録に云つとまゝなり又殿

上人を中殿のくまをて概乃草の如き

と云りて鬼と云

らふりて概乃草と云り

又概乃草と云り

又概乃草と云り

又概乃草と云り

又概乃草と云り

又概乃草と云り

又概乃草と云り



けりて鬼代目とてうちくす 博桑抄と志願  
 傳り乞石神の靈儀ありしが此而後乃從とて  
 了代乞也と仰るそ人をも口折りなれりかきぬれ  
 備わ夜とおいふとあり敷のやうなまきこ  
 聞終礼記御儀ありものせりなれり後世に  
 終儀志あるをいふとありけり又又選の強  
 御の東桑賦と詳なり又は夜赤丸ぬ穀とま  
 るとてやすくも後漢書にほふ力えりぬ穀の  
 中に在るのまの今 國俗は豆うつもけり  
 や おれやひと鬼とぞいふと義あり原氏物語よちやふと傳り  
 備とやらぬといふありぬらふとい追とて是ありけり

ちとけりてぬ人のまかこたは角ありて佛書よつる  
 其の<sup>一</sup>三<sup>二</sup>種<sup>三</sup>の物ありとせり<sup>一</sup>のまあり原抄に<sup>二</sup>法<sup>三</sup>の  
 と<sup>一</sup>種<sup>二</sup>あり<sup>三</sup>法<sup>四</sup>の<sup>五</sup>靈<sup>六</sup>氣と<sup>七</sup>て<sup>八</sup>なり<sup>九</sup>法<sup>十</sup>の<sup>十一</sup>氣<sup>十二</sup>を<sup>十三</sup>法<sup>十四</sup>の<sup>十五</sup>人  
 たりとて<sup>一</sup>物<sup>二</sup>を<sup>三</sup>法<sup>四</sup>の<sup>五</sup>と<sup>六</sup>い<sup>七</sup>ふ<sup>八</sup>あり<sup>九</sup>と<sup>十</sup>あり<sup>十一</sup>法<sup>十二</sup>の<sup>十三</sup>二<sup>十四</sup>が<sup>十五</sup>  
 たりと<sup>一</sup>物<sup>二</sup>を<sup>三</sup>法<sup>四</sup>の<sup>五</sup>と<sup>六</sup>い<sup>七</sup>ふ<sup>八</sup>あり<sup>九</sup>と<sup>十</sup>あり<sup>十一</sup>法<sup>十二</sup>の<sup>十三</sup>二<sup>十四</sup>が<sup>十五</sup>  
 善きなり法を<sup>一</sup>法<sup>二</sup>あり<sup>三</sup>い<sup>四</sup>ふ<sup>五</sup>あり<sup>六</sup>法<sup>七</sup>と<sup>八</sup>あり<sup>九</sup>い<sup>十</sup>ふ<sup>十一</sup>あり<sup>十二</sup>い<sup>十三</sup>ふ<sup>十四</sup>あり<sup>十五</sup>  
 又 國俗は豆とて<sup>一</sup>法<sup>二</sup>を<sup>三</sup>と<sup>四</sup>り<sup>五</sup>い<sup>六</sup>ふ<sup>七</sup>鬼<sup>八</sup>を<sup>九</sup>と<sup>十</sup>り<sup>十一</sup>い<sup>十二</sup>ふ<sup>十三</sup>と<sup>十四</sup>り<sup>十五</sup>  
 たり<sup>一</sup>法<sup>二</sup>を<sup>三</sup>と<sup>四</sup>り<sup>五</sup>い<sup>六</sup>ふ<sup>七</sup>鬼<sup>八</sup>を<sup>九</sup>と<sup>十</sup>り<sup>十一</sup>い<sup>十二</sup>ふ<sup>十三</sup>と<sup>十四</sup>り<sup>十五</sup>  
 勝中<sup>一</sup>法<sup>二</sup>を<sup>三</sup>と<sup>四</sup>り<sup>五</sup>い<sup>六</sup>ふ<sup>七</sup>鬼<sup>八</sup>を<sup>九</sup>と<sup>十</sup>り<sup>十一</sup>い<sup>十二</sup>ふ<sup>十三</sup>と<sup>十四</sup>り<sup>十五</sup>  
 大とと<sup>一</sup>法<sup>二</sup>を<sup>三</sup>と<sup>四</sup>り<sup>五</sup>い<sup>六</sup>ふ<sup>七</sup>鬼<sup>八</sup>を<sup>九</sup>と<sup>十</sup>り<sup>十一</sup>い<sup>十二</sup>ふ<sup>十三</sup>と<sup>十四</sup>り<sup>十五</sup>  
 おまも<sup>一</sup>法<sup>二</sup>を<sup>三</sup>と<sup>四</sup>り<sup>五</sup>い<sup>六</sup>ふ<sup>七</sup>鬼<sup>八</sup>を<sup>九</sup>と<sup>十</sup>り<sup>十一</sup>い<sup>十二</sup>ふ<sup>十三</sup>と<sup>十四</sup>り<sup>十五</sup>  
 鬼とて<sup>一</sup>法<sup>二</sup>を<sup>三</sup>と<sup>四</sup>り<sup>五</sup>い<sup>六</sup>ふ<sup>七</sup>鬼<sup>八</sup>を<sup>九</sup>と<sup>十</sup>り<sup>十一</sup>い<sup>十二</sup>ふ<sup>十三</sup>と<sup>十四</sup>り<sup>十五</sup>  
 ○公衆<sup>一</sup>の<sup>二</sup>の<sup>三</sup>の<sup>四</sup>の<sup>五</sup>の<sup>六</sup>の<sup>七</sup>の<sup>八</sup>の<sup>九</sup>の<sup>十</sup>の<sup>十一</sup>の<sup>十二</sup>の<sup>十三</sup>の<sup>十四</sup>の<sup>十五</sup>



















或製人ひとりに物ゆせるといふと人  
 の毒は強弱をいれ天命を逃い何うそのまゝに  
 とまぬり毒をいやくに危年といふも程なれど  
 力をい作すといふに病いんをいふもいふ  
 ありといふも乃後才三の成れ日と臘日と号し  
 ば日神とすといふ又古に聖賢民を功ある人とすつれ  
 より一瀝量の儀をいふといふ又玉船を興ふ臘の先  
 祀とすといふ蜡を百神とすといふ因言にして其意をいふ  
 小室大室を二平日乃百今世俗よ室の中と稱すは  
 百よ食物薬物をも製すといふに性よる久し

たくりて扱せは此何物ぞすの物とよ記す

○乾薑と製する法 母薑とす其れ中のあの一七日  
 都回又日湯して取あけ皮と去日よ干野一

○山茱とすといふ野一とす法は此あまかりたり  
 年久しと薯蕷とあとい細切して皮と去切す

て米粉とあといいけ糸よつてぬり陰乾し守鉄と云  
 ○糯米と稷米と法米よる法 一日あ又漬し

一日の乾すぬびとらる七次許久しく湯せハ米乳  
 ぬきとあし糯米の末して懸餅と稷米の飯

と粥とて病人よ用れハ泄痢とさめ腸胃と補







くくたふふとくけく食ひ甚矣あり性熱泄痢を  
その脾胃と腸と未だけしと再煮て用へ一但宿  
食氣滞ありあり用へく次

○赤小豆と多苑とる法 赤小豆と室中又煮く  
とくくくたふふ入くして煮たり法千の收ま  
年と経久して出用しては世守異月一陰脾の  
食より用てもと急く此即附用やすれと益とす  
○腹水ありと糖と製 大よ切て二三る知くして後水  
よひれ又二三日ありて二粒 上よ付方米粉と煎  
去く又腹水に八豆一煮る附五粒熱湯に入

熱中化肉やと通るや湯の中は垂く五粒 雜  
煮と次或久くして垂て取出し熱湯に漬く米  
豆粉と衣く一用の粉をくなく煮く性熱と氣  
と石塞美久くくくとく西月中ハ二三の一度水  
を換へ一二月より毎日煮くとのあり一上よつさる  
米粉と去されの候換へ奥あり

○腸ありして事効と製法 久くして換せ凡  
事効大豆と煮るより大豆と煮る水と石粉斗入  
粉食のた後よりに煮るより煮く火とく後ハ火  
ハこえん改ありたきとて煮れんと能くめて氣



乃濃く煮るに申すると煮ゆるに夕合色までとけハ  
 然に之を煮してありて又申すとたきあてて  
 煮出—白あきよくばくたれはあくと飲より明初  
 まては—ても用—薪のかの—も—は  
 如此まれの薪と功とと多く不費—て終熟—  
 豆汁不濃—して性食く味美なりと久くと久—  
 くなきよく煮せし—めんとまれの大豆汁ぬき  
 て—すに存る未熟の味あり—  
 二三—粒—  
 煮れぬ梅せす

○白米粉の製法 大豆を皮と去水に浸し—  
 煮—熟—し上白乃米麴を五斗或は八斗三斗  
 合—よく—う—つ—子桶—はめ—三日—日—は—て  
 用—の—味—極—く—背—く—色—也—

○大豆末粉と製する法 大豆一斗麴一斗酒糟一斗  
 米糠一斗塩一斗右一のよつを合するなりぬの—  
 よ—は—其—留—性—極—く—勝—中—に—つ—る—は—病—人—に—用—て—  
 魚—肉—を—と—と—煮—く—群—よ—  
 ○ぬ—う—と—製—する—法 米のぬりとあてかてこぬ  
 純—之—終—り—て—熟—し—た—る—時—火—を—た—き—ま—す—  
 豆—粉—の—多—く—つ—る—に—付—取—か—ぬ—り—一—石—は—塩—一—斗—も—



并苦油のりごと入白少く結つてせぬ上は過亂  
乃強り方とさす一桶少くも瓶として色味とさす  
とく至末年正月又丸也一又白入つて丸の  
色入る一

○又法ぬくと多のくかぐと○大さぬ丸當の内  
に海方望丸一と丸桶として色瓶にのり入至十  
又日許とてかぐ一丸の附日より一白少くつとく  
とさすと塩ととく白少くはる合せ丸何を桶と  
て色瓶にのり色入と一付金をり塩いあてよと  
とる人の丸一丸此は法を久一とて味變せぬ

臭の良法あり膠巾に氣滯り合滯り一と云

病人に用一

○厚鬼と塩淹りする法 厚鬼等丸毛とぬきとて  
膠と去洗り毛焼せぬと丸中膠と塩と一と入  
又厚り毛滯りす塩と多くこき入又外子塩と  
よく付足とつと多とて丸は結合せさうさるに付りて  
一和とけの塩ゆきとさるるを厚紙よつとせると  
苞よつとせけるさけま一徳多丸の塩淹り法丸丸  
○塩淹り法 湯鍋と徳比とさう塩と多くはき  
桶入とす丸の切方付れと一丸とさるるを



合せ一俵くまひくして結せり  
又鷹の包てまきくまひくして  
こまの包縄あまくまきく  
よりの打直して塩代結納する時つり  
一、或荒ちま塩くまひく

○魚を糟漬乃法 魚をよ塩と付く旨り  
一日一夜置

糟漬乃法云云糟や塩は漬置  
一、塩く漬まれば 午後取申し

あひく塩と法去紙といく  
か入すれくひくまんと塩と  
あひ漬して塩とまきく魚を  
糟に漬くもの

とくまきくまひく  
骨ある縄をまきくまひく  
まきく風引ちく塩の糟  
まきく二夜用てまきく  
塩あを加へやりく

○鯉解骨乃法 大の切り骨と去濁  
浸さひまきくまひく  
水起まれ厚下まつり  
よとこまひつてまきく  
○焼大根乃法 少々初日  
焼く皮と削き



根乃事又各小繩乃西子究とあけ小繩又穿く  
風ぬる事とてとつら次日夜加よりけりて大室の  
終る事とて凡三十日とてとつら三番目日とて  
取れりてとぬ事代とてよりけりてとてとひてと  
あつとととつらして風味甚佳

○胡椒シナガク乃つつけ物と製法一とて胡椒の  
大なりとてとて能は二三日とて先ぬるととて  
つらと能はとてとつらとに改法とてと初より  
ととつらとこれの味とてとてとてとてとて  
牛蒡ゴザクとてとてとつらとてとてと

人の生質より業中の事とてとてとてとてと  
織りたの口舌とたつらとつらとつらとつらと  
は切らして織月たあにサリとつらとつらとつらと  
湯と較度泡とれ毒とつらとつらとつらとつらと  
つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと  
つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと  
入つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

室中の事とてとつらとつらとつらとつらと  
つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと  
つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと  
つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと  
つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと



結一切の瘡瘻及痘疹癩癧等れ瘡毒辟除時疫と  
 治し目瘡とやこれと等ゆと他り瘡を他れ味  
 散美にして冬は堪乞とて餘肉を浸せり夏月を搗  
 せ又又穀百果花蔬の種まじへて浸せり實多し  
 穀と生せす且りいすす煮て古毒の瘡疫瘰癧  
 と治し一月令度義よ見えたり又冬は臘を味す  
 食類とのりに煮く油搗地多れ煮くすれり不  
 臘月よ志めぬる香油と焼く煎す此は瘡毒入膏  
 葉に用て神効あり婦人の胎をぬれは瘡毒く  
 乳生せす多し煮く納葉の用は此へ一物食は  
 此へ用く功他法は倍は又臘月の粘脂と煮  
 所へ膏葉をい合す一と月令度よあはれり  
 凡形銀錢等とこころ十月より正月までの月  
 下は性よく煮く糲生せは瘡毒多しとよく良  
 柳の枝と切て煮きれあは地を搗ハ粘りて根と生  
 け月忍冬煮と納葉とこれと夏月茶れと煮  
 てのめは瘡疥と瘰癧  
 冬月甚多して瘡毒の者い夜うとく刃冷て  
 或冬月多に瘡毒を記するあり口腹すくは  
 微氣ありい定を煮く冷衣と脱きて常人れ  
 臘

此へ用く功他法は倍は又臘月の粘脂と煮  
 所へ膏葉をい合す一と月令度よあはれり  
 凡形銀錢等とこころ十月より正月までの月  
 下は性よく煮く糲生せは瘡毒多しとよく良  
 柳の枝と切て煮きれあは地を搗ハ粘りて根と生  
 け月忍冬煮と納葉とこれと夏月茶れと煮  
 てのめは瘡疥と瘰癧  
 冬月甚多して瘡毒の者い夜うとく刃冷て  
 或冬月多に瘡毒を記するあり口腹すくは  
 微氣ありい定を煮く冷衣と脱きて常人れ  
 臘







修すより決とすう志んれと今け書ふに難書此況  
たとそまう載て人乃披閱の傳とるに可否ハ  
乃ん人代擇とこれと五能とるまの之

十二月乃古候才一層中郷才二階如巢才三階如巢才  
中多れ之候あり中四階如乳才五階多屬疾才云  
水澤腹堅太太多れ之候あり  
七年十一月よりして  
七年二候あり七年三候の  
事八月令及呂氏より秋  
准南子より云なり

十二月昼夜乃刻數少多ハ与山異及霜大寒ハ与大  
異及霜之 月令度霜

日本采時記卷之七尾

都鄙祭事記

正月

元日 禁中御節會 ○二日 東為中祭寺松嶺子 ○四日  
苑多井殿遊鞠始 ○七日 禁中御節會 冬 笠面山祭  
才天祭 菜摘川神子 ○八日 十四乃と後七日御節會  
○十日 西之文夷集 ○十二日 南都心經會 ○十四日 十七  
日と伊勢山御師子及神子 ○十五日 雲後爆竹 漢詠歌  
迦野能 河内國平名河津 後赤國坊多松嶺子 ○十六日  
禁中御節會 節 福林寺大般若 漢詠同慶堂念仏  
○十七日 伶人集并鳥苑了 ○十八日 禁中爆竹 ○十九日



八幡疫病止 廿五日とけ地忌 ○廿二日 本山善四寺  
新迦羅能 ○初宣 勸言系

二月

朔日 七日と南教西多也 同中四つと二月堂新 ○四日  
初年忌 ○七日 十日と南教新の能 ○九日 十日と  
山形新也 遠き高経後 ○十日 本山麻苑寺忌 ○十九日  
涅槃会 暖瀬大徳松 本山國表山忌 ○十六日 総塔  
○廿日 濱月忌 ○廿二日 天竺寺 伶人孫 ○廿五日 送の  
寺忌 山形天来御忌 吉祥院あり 龍林宰府天来忌 ○  
初卯 大系聖忌 ○初午 掃墓 志女堂 本橋寺儀

法多 和泉國水月寺初午系 ○上申 春日系 ○彼岸系

三月

三日 楚中關難 イナリあり 恒石御午 石山系 粟津系 土佐  
御午 坂石 ○又日 一寺寺忌 竹島寺忌 ○六日 一寺寺忌  
終多 今日より 十日と暖瀬大念佛 ○八日 泉涌寺 天  
忌 ○九日 水尾系 泉涌寺 天忌 幹の形 ○十日 今迄  
安楽花 ○十一日 吉野會式 花見 ○十二日 今日より  
日と天名経孫傳 日吉八五の 初敷之形 今日より 十日と善法寺大師  
忌 本山承和堂 ○十四日 壬子念佛 サマと ○十五日 比良系  
武別前田川大念佛 山崎史の形 ○十八日 暖瀬系



○十九日 暖氣新也身拔○廿一日 東寺仁智弘法親從  
之維女坊○中の午 午の日ニウミ付ハ 掃部山興出 初の午ナリ 女奉  
念佛 花開 之洛筆摘 石清水臨時寺

四月

朔日 江別籠麻衣○二日三日 南都多る寺の終○四日  
廣津系 龍田系○八日 灌佛 山門敷壇堂一拜帳○  
九日 清の地系○十四日 南麻の法事○十六日 三  
井寺と園子系○十七日 紀州和号山系 難免踊  
日光山東照系 尾別名古屋権現系○廿日 勢  
回管見○廿一日 志能勢佐○上卯 掃部系 山崎系

○上辰 八郎系○上巳 山科系 江別女家系 月世同系  
○初申 大平系 平野系○初酉 松尾系○初亥 大津系  
○中子 吉田系○中卯 江別八幡系○中辰 向日系  
○中巳 久世系○中午 賀茂系 江別菅の系○中  
申 賀茂系 山王日吉系 山之上系○中酉 賀茂  
系 松尾系 梅系 岡白殿聖多入御事坊○中  
亥 暖氣系

五月

朔日 賀茂競弓足搦 江別松本系○又日 賀茂競弓  
足系 國の御祭系○七日 今文新樂師出○八日



○十三日 懷別室明神祭 ○十五日 今更祭 ○廿日  
多夜堂見 ○廿三日 坂本夜社祭 ○廿八日 佐吉神田入  
○晦日 祇堂御輿洗

六月

朔日 廿一と富士詣 ○二日 高旗の虫拂 廿四 ○五日  
祇園會 初 ○七日 祇園會 今日より十四日と祇堂  
御輿入 ○十四日 祇堂會 尾別津島祭 竹屋島祭  
海後朝天子祭 ○十五日 尾別津島祭 江戸山王祭 二番  
茂赤坊女祇堂會 他山祭 寺前小倉祇堂會 ○十六日  
今日より伊勢多礼 ○十七日 お園音職法 志願寺

祭 上殿高祭 ○十八日 祇堂御輿入 ○十九日 四重河原  
細原 廿日 ○廿日 鞠言竹切 ○廿一日 此日と礼の細原  
○廿二日 大坂屋唐祭 ○廿三日 杉尾祇堂あり能三女  
明日と取敷 ○廿四日 芝堂干日詣 ○廿五日 佐寺の出干  
三谷虫拂 大坂天海法 揚立祭 ○晦日 賀屋あり五月  
能 佐吉神祇 江別唐橋子日集 ○尚月中 安藝之文節市日

七月

朔日 賀屋後日詣 ○六日 水路津文洗 ○七日 山神社  
壇煤拂 寺前虫拂 并池坊立祀 龍舟并夜鞠 二伏  
参入 ○八日 文殊會 ○九日 六反詣 ○十日 清水子日詣



○十二日十五日とあか秋の燈籠 ○十四日 禁方燈籠 ○十  
 五日 八幡安居の辰 三井と女坊 若葉施燈鬼 今日日  
 より明日とあか秋の石動子日系 十七日と泉涌寺の辰一花  
 帳 ○十六日とあか秋の字 松崎好如の字 西かきあか秋  
 船の火 松崎好如の字 紀の念仏やうり 友正九子あか秋  
 今日まで  
 豫別山田家大津へ入 ○十七日 葉の喜日系 ○十八日 所喜  
 台所出 ○廿四日 地蔵系 ○廿五日 豫別遊の文通

八月

朔日 禁方へ 二方より所喜をよ上 松尾お撲 和泉園の  
 村家 明り ○二日 堺天邪系 ○四日 山形天邪系 越前

敦賀氣比系 ○六日 比内白飯一花帳 ふりより下  
 去て一花 ○十五日  
 御下八幡系 若葉八幡系 若葉 畑枝系 八幡放生會 若葉  
 寺系 大坂江川と花火 廣次月見 比内保川八幡  
 系 寺門寺湯系 菟新若葉系 ○十八日 所喜系 若葉  
 系 ○廿二日 廣隆寺の子供 ○廿三日 廿五日と菟新若葉  
 府天邪系 ○廿四日 吉田系 ○彼岸會

九月

一日 山形系 木幡系 ○八日 泉涌寺の辰 ○九日 鶴宮系  
 若葉系 祝願系 伏見所喜系 大坂生玉系 菟新  
 宮良大明系 肥前吉崎海防所喜系 ○十日 下名所系



大徳院後堂祭 五徳天罪祭 山科口の文祭 伏見五徳院  
 ○十一日 後勢寺幣 岸吉田の儀 後勢御旅會 ○十二日  
 古奉祭 ○十三日 白川祭 ○十五日 雲合祭 西園口祭 比叡御  
 邪の二年の儀 終馬 河内一宮祭 光前小倉祭 ○十六日 東  
 山寺持鉢の儀 寺祭 ○十七日 栲別池田呂服漢祭 ○廿日 下京  
 中女祭 多岐祭 竹園祭 建仁寺門外東祭 聖恩寺祭 山懐地  
 の祭 ○廿二日 大坂府康慶院祭 ○廿三日 古奉祭 ○廿四日 園田祭  
 本師祭 淨寺祭 麻呂祭 須賀屋祭 ○廿五日 延徳流痛定祭  
 田原祭 ○廿六日 小山祭 ○廿七日 栲別村祭 ○廿八日 鳴瀧祭 大坂府  
 三島祭 ○廿九日 午月防山祭 ○首月 中書院の儀 坊有祭

十月

又日 如心寺造了忌 十六日 上津寺衣冠寺十夜 ○六日 南無彌  
 寺法堂會 ○十日 櫻川金谷長祭 十六日 上津寺佛堂會 ○十  
 二日 日蓮宗彰流 ○十五日 淨徳堂王院堂前冥徳 栲川金谷  
 冥徳 ○十六日 高橋寺拜了忌 ○十七日 内侍所御旅會 ○廿日 江  
 戸徳商人冥祭 四徳寺河土佐の儀 文藝之掃 ○廿二日 崇徳天徳祭

十一月

八日 不空の祭 指務御の多 ○十二日 戸也祭 ○廿二日 一向不空の忌  
 廿四日 延徳寺佛心 ○廿五日 大師権 智恵大師 長りあり ○廿六日 廿八日 上  
 喜日御祭 ○晦日 上喜祭 ○初申 大文権現祭 ○初宣 結縁祭







